

01

三十一文字のドキュメンタリー

平成20年間の歌会始から百人一首を編む

Documentary of 31 characters

The tanka of 100 people is chosen from
"Imperial Poetry Reading" of year of 20 of the Heisei era.

映像メディア学科・教授
Department of Visual Media・Professor

加藤 和郎 Kazuro KATO

要旨

万葉集における「歌の前には平等」の伝統は、宮中歌会始に今も引き継がれ、国民から詠進された和歌が披露されている。わずかに三十一文字であるが、その凝縮された歌の背景には庶民の暮らしや思いが深く込められており、時代を伝えるドキュメンタリーとしての価値が高い。

はじめに

カメラのなかった時代、人は記録を文字や絵に残す以外ありませんでした。なかでも、五音七音で構成される三十一文字の和歌は、調べと響きのよさを通じて伝達力と保存性に優れていたため、上古の作品もまったく色褪せていません。近代以降の記録媒体である写真や映像がわずかに100年を経たらずして激しく劣化するのに比較すると、メディアとしてのほかに長い寿命に驚嘆せざるを得ません。

『万葉集』を奈良時代の人々の人間ドキュメントとして読み取ることができるのは、三十一文字に凝縮した和歌というメディアの確かさなのです。

また、万葉人は目の景色や事物の微かな変化に敏感であり、その視覚は思覚に直結していました。カメラを手にした現代人よりビジュアル感覚に富み、加えて心情をビジュアルに忍ばせることにも長けていました。つまり叙事性と叙情性を併せ持つ、目の記録と心の記録を今に伝えてくれているのです。

直接的には“情景”しか読み取ることが出来ないものでも、その歌が詠まれた“状況”を背景に置くことでドキュメントとなります。限られた文字数におさめるために、「言わずもがな」は捨て、「暗にほのめかす」ことで大胆に“圧縮”された和歌は、その時代環境や時代思潮をもとに“解凍”して読み取ることが必要ですが、それさえ出来ればアンデルセンの『絵のない絵本』のごとく行間から映像までが立ちあがってくるのです。

万葉集のすごさは、それだけではありません。

天皇をはじめとする宮中の公卿から庶民、さらに東国に残された防人の妻の歌に至るまで、その時代を生きた多くの層の人々の、暮らしに基づく感情の機微を集めています。それは、「歌の前には平等である」がゆえに可能であったことであり、だからこそ万葉集は、時代の暮らしを満遍なく編集した「ドキュメンタリー」であり、世界に比類のない民族遺産といえるのです。

「歌の前には平等」の伝統は、1200年を経た現在も天皇・皇室をはじめ専門歌人や詠進入選者が一堂に集う「宮中歌会始」として年頭に引継がれています。かつて、某誌にを記したのがきっかけとなり、平成天皇即位20周年を記念して「平成のドキュメント」となりうる歌を百首選ぶよう委嘱されました。

これを機に本稿では、万葉集における視覚について略述したうえで、選び終えた平成百人一首を紹介し、ドキュメントとして読み解くための状況補足を添えることにしました。

1 万葉集における視覚

万葉集の名の由来については、「万(よろず)の言の葉」を集めたとする説のほかに、「末永く伝えられるべき歌集」(契沖および鹿持雅澄)とする説がある。それは、『古事記』の序文に「後葉(のちのよ)に流(つた)へむと欲ふ」とあることから、「葉」を「世」の意味にとり、「万世にまで末永く伝えられるべき歌集」と取る考え方なのだ。「万の言の葉」説は、『古今和歌集』の「仮名序」にある「やまとうたは人の心をたねとしてよろづのことはとぞなれりける」と混同しているように思われる。万葉の時代はまず「見つめる」ことが重要であり、人の心を種とするのは平安時代に入ってからのことなのだ。

万葉人はビジュアル感覚に優れたドキュメンタリストであった。とにかく「見る」ことが好きであり、「思い」は見ることから深化してゆく。いわば、カメラを持たないカメラマンであった。なぜかといえば、『万葉集』4516首には「見ゆ」「見よ」「見れば」「見つる」「見るに」「見れども飽かぬ」「見つつ偲ふ」「見れば清(さや)けき」「かえり見すれば」など、見る行為を直接歌ったものが1100首を超えるからである。なかでも、天武天皇の「よき人のよしとよく見てよしと言ひし芳野よく見よよき人よく見」は、自然凝視を代表する一首であり、万葉集を代表する眼差しの歌である。次の時代の『古今集』と比べてみると、視覚の確かさがより鮮明になる。

古今集では、見ゆなどの目言葉がすっかり消えてしまい、「思へども おもはずとのみいふなれば いなやおもはじ 思ふかひなし」に代表されるように、歌づくりの発端を眼から心へと移してしまう。古今集序文にある通り「ひとの心を種」として、「視」から「思」へと一気に傾斜してしまう。これは歌づくりという行為が、庶民を含む直截的な感動の記録から、宮廷文化人や専門歌人による芸術行為に変化したためと考えられる。つまり作歌の動機が、フィールドにおける観察から、教養を素とした思索へと移り、「心に思ふこと」が「見るもの、聞くもの」より先行することになったのである。現代にたとえれば、「万葉歌人はカメラマンでありドキュメンタリスト」であり、「平安歌人は書斎の詩人」なのである。

唐木順三は『日本人の心の歴史』(1976. 筑摩書房)において次のように記している。

(万葉歌人たちの)「見る」対象は多くは自然である。吉野の場合は、殊に天武・持統朝においてはそこに思ひ出があり、自然の

風物にも苦渋と勝利の過去の記憶がなまなましく結びついてゐたらう。吉野の自然を飽かずみつめた人麿その他の宮廷人たちは、一々の風物になまなましい歴史を感じ取ってゐたらう。吉野以外の歌にも、或ひはそれを歌ったひとの胸中には自己の記憶や思ひがあったかもしれぬ。然し、「見る」対象は、そういふさまざまな思ひをこめつつも、自然の美しい風物であった。

人麿の詠む吉野の山河は「この川の 絶ゆることなく この山の いや高知らす 水激つ(たぎつ) 滝の都は 見れど飽かむかも」(万葉集巻一)であった。また、讃岐においても、「讃岐の国は 国柄か 見れども飽かぬ」と長歌に詠んでいる。「見れども飽かぬ」とは美的な耽溺だけではなく、見ることのなかに思いをかきたてるということが含まれているのではないだろうか。

唐木順三はこれを、「見るが単に空間でなく、時間に関わっている。見ることは過去に関わり、そしてまたときに未来にまで及んで、それを眼前の山河において見てゐる。」と同書で解説している。

なお、歌の発生について、紫式部は『源氏物語』の「螢の巻」で光源氏に次のように語らせている。

「よきもあしきも、世に経る人の有様の、見るにも飽かず、聞くにもあまる事を、後の世にも言ひ伝へさせまほしき節々を、心にこめがたくて、いひおき始めたるなり」

歌がドキュメンタリーであり、時代を超えたメディアであることを紫式部は見抜いているのだ。

2 歌の前の平等

万葉集の最大の特徴は「歌の前には平等」であることであり、作者は皇族・貴族・官人だけでなく農民・防人・遊女まで広い階層にわたる。「思ふ」から「見ゆ」への回帰は芭蕉の俳句において、さらに正岡子規の『歌よみに与ふる書』における古今集批判で顕著となったが、「歌の前には平等」への回帰である『宮中歌会始』について簡単に記しておきたい。

宮中歌会始は古くは『歌御会始(うたごかいはじめ)』と呼ばれ、その起源は明らかではないものの、鎌倉時代中期の亀山天皇の文永4年(1267年)1月15日に宮中で催されたことが、『外記日記』に内裏御会始として記録されている。その後、江戸時代を通じ明治維新後も、以下の改革を加えつつ今日まで連綿と続けられてきた。

国民からの詠進が認められたのは明治7年(1874年)で、5年後には詠進歌のうち特に優れたものを選歌として歌御会始で披露されるようになる。さらに3年後には御製(天皇の歌)から選歌まで

が新聞に発表されるようになり、昭和3年(1928年)には『歌会始』と呼称が変わる。終戦後は「御歌所」の廃止に伴い、選歌作業が在野の歌人に委嘱されるとともに、「お題」も平易なものとなり、入選者の参列が認められることになった。昭和28年のテレビ放送開始以後は儀式が中継されることで詠進歌の応募が促進された。ちなみに平成21年のお題「生」には2万1184首が宮内庁に寄せられた。

筆者は昭和50年代に数回にわたり中継に携わったが、歌会始は概ね次の流れで進行される。

まず司会役の「読師(どくじ)」に一首ずつ届けられ、確認の上で「講師(こうじ)」に渡される。講師がそれを節をつけずに読みあげたのち、「発声(はっせい)」が第1句から節をつけて歌い、第2句以下を「講頌(こうしょう)」4人が発声に合わせて吟頌するのである。これを披講(ひこう)といい、一般からの詠進者の歌から始めて、選者の歌、召人(めしうど)の歌、皇族殿下のお歌、皇后陛下の御歌(みうた)と続き、天皇陛下の御製(ぎょせい)で終わる。宮殿松の間における古式ゆかしい年中行事である。

歌会始が今の形になったのは戦後ではあるものの、その原点は「歌の前にはすべて平等」としてあらゆる階層の歌を全20巻にまとめた万葉集にあることは明白である。世界に比類のない文化を有していることを誇るべきであろう。

ドキュメンタリーとしての平成百人一首は、昭和天皇の喪中のために中止となった元年を除く20年間に披講された約600首から選んだものである。内訳は、天皇および皇室の15首、召人及び選者の30首、詠進入選者からの55首であるが、これらを俯瞰するとき、映像によるドキュメンタリーでは表現しにくい「時代」という空気のようなものの確かな記録」になっていることに驚かすにはいられない。フィルムやビデオなど近現代の記録が、自然劣化および媒体の変化による変換作業によって像の鮮明さや色の鮮やかさが失われてきたことに比べて、万葉集が千年以上も褪せることなく古代人の暮らしや思いをくっきりと伝えていることを考え併せると、歌会始で披講される平成の和歌たちもまた、千年後に向けての貴重なアーカイブになるのではないだろうか。

3 平成歌会始百人一首要

3.1 天皇および皇室の歌 15首

新しき一日(ひとひ)をけふも重ねたまふたゆまずましし長き御歩(みあゆ)み

清子内親王(紀宮)が黒田家に嫁がれる平成17年、皇室典範の規定により皇室離脱となるために最後の列席となった際の歌である。お題は「歩み」であった。両陛下の日々を、長年つづさに見守り、心を配り続けて来た温かなまなざしがあつてこそ生まれた歌

ではなかろうか。平成天皇20周年の百首を誘うにあたって、これほどふさわしい歌はないであろう。この一首を導入歌として、御製(天皇の歌)は平成5年「空」の一首を選ばせていただいた。

外国(とつくに)の旅より帰る日の本の空赤くして富士の峯立つ

天皇は即位以来32カ国を訪問されているが、この歌は平成4年に懸案であった中国訪問を終えられて帰国の際に詠まれた。中国残留の日本人孤児たちが、あるいは北朝鮮から解放された拉致被害者たちが、機上から見る富士山に帰国を実感したというが、その思いは境遇を超えて日本人共通のものに違いない。いづれにしても、国土の象徴を国の象徴が見下ろすという取り合わせが壮大であり、響きが雄々しい。現代の「国見歌」[1]のようにも思える。なお、天皇は即位20年を振り返って、次のように述べておられる。「象徴とはどうあるべきかということは、いつも私の念頭を離れず、その望ましい在り方を求めて今日に至っています」(平成21年4月記者会見)

幸(さき)くませ真幸(まさき)くませと人びとの声渡りゆく御幸(みゆき)の町に
皇太后宮御歌 平成16年「幸」

両陛下は即位から約15年かけて全都道府県訪問を果たされたが、行く先々で、お二人の健康を祈る歓声が湧き上がった。「幸」を三通りに繰り返す言葉の豊かさは、和歌ならではのリズムを奏で、沿道の晴れやかさが伝わってくるようだ。

人みなは姿ちがへどひたごころ戦(いくさ)なき世をこひねがふなり
皇太子殿下 平成9年「姿」

ニュースで知り得る民族紛争はほんの一握りに過ぎない。世界の30を超す地域が今も紛争中であり、被害が被害を生み憎しみと怨嗟が増大し続けて、テロの脅威は消えていない。

大地震(おほなみ)のかなしみ耐へて立ちなほりはげむ人らの姿あかるし
皇太子妃

日本における地震の最古の記録は日本書紀に記された「大和国明日香村で地震」(416年)である。それ以降、日本列島は歴史的な大地震に何度も見舞われているが、その度に被災者は遅く立ち上がり、緑はよみがえって、暮らしを取り戻してきた。これは阪神大震災の被災地を訪問されたあと詠まれた。

人々が笑みを湛へて見送りしこふのとり今空に羽ばたく

秋篠宮文仁親王 平成18年「笑み」

環境庁編『日本の絶滅の恐れのある野生生物—レッドデータブック』によれば、鳥類だけでもミヤコシヨウビンなど13種がすでに姿を消している。国の特別天然記念物コウノトリも昭和40年代に一旦は絶滅したが、兵庫県豊岡市で人工飼育を始め保護・増殖に努めた結果、近年は野生に戻すための放鳥が毎年行わ

れ、全国各地で固体が確認されるようになった。

染織にひたすら励む首里びとの姿かがやく夏の木かげに

秋篠宮文仁親王妃紀子 平成9年「姿」

伝統工芸の手わざの中に地域の誇りが色濃く残っている。100年以上を継続するとして国が指定した「伝統的工芸品」は全国に211品目ある。首里織は、琉球王国時代に東南アジアや中国との交易の中から学んだ技術を沖縄独特の気候風土の中で育んだ格調高く麗美な織物である。

火をふきて五年(いつとせ)すぎし普賢岳人ら植ゑたる苗みどりなす

常陸宮正仁親王 平成8年「苗」

地震と同様に火山による被害は日本列島の宿命である。皇室の被災地訪問は、復興への何よりの励みとなってきた。

雑草といふ草はあらずといひたまひし 先(さき)の帝(みかど)をわが偲ぶなり

常陸宮正仁親王妃華子 平成13年「草」

生物学者でもあった昭和天皇は、侍従が「ここから先は雑草です」と申し上げたのに対して、「雑草という草はない。どんな植物でも、みな名前があり、それぞれ自分の好きな場所で生を営んでいる」と答えられたという。

百鳥(ももどり)のさへづり聞こゆ朝まだき霧のながるる森の中より

高松宮宣仁親王妃喜久子 平成3年「森」

喜久子妃の父方の祖父は最後の将軍の徳川慶喜である。孫のように可愛がっていた紀宮清子内親王の結婚を楽しみにしていた。婚約内定発表が予定されていた日には入院先の病室でテレビ中継が見られるように準備が進められていたが、当日92歳で薨去されたため発表が延期された。高松宮家は後継となる子孫がないため系統が途絶えることとなった。

さざ波をこがねに富士を紅に染めて初日はいまのぼりゆく

三笠宮崇仁親王 平成6年「波」

琳派の屏風絵のような豪華な光景であり、朝の光に映える微かな色の変化は高精細な映像作品を見るようでもある。

真珠貝採らむと海女の潜(かづ)きゆく水面(みのも)に小さく白き波立つ

三笠宮崇仁親王妃百合子 「波」

海女の最古の記録は『魏志倭人伝』にあり、「海中へと潜り好んで魚や鮑を捕る」と記されている。また、神奈川三浦市毘沙門洞穴遺跡からは、1世紀前後と見られる鹿の角でできたアワビオコシと見られる遺物が見つかった。『万葉集』では真珠、鮑などを採取するために潜ることを「かづく」と詠んでいる。水面に湧き立つ白い波は古代から変わらぬ潜きの人々の生の証なのだ。

大君が手に植ゑましし早苗田をそよがせてさつきの雨ふりそそぐ

高円宮憲仁親王 「苗」

天皇の稲作は古事記や日本書紀に描かれた神話に基づいており、皇居内に水田がある。収穫された稲は、伊勢神宮の神嘗祭、宮中での新嘗祭に供えられる。

木もれ日に風かよふ朝君とみし身の幸(さいはひ)のよみがへりくる

高円宮憲仁親王妃久子 「幸」

高円宮は芸術スポーツに関心が高く、気さくな人柄から皇室のスポークスマンを自認されていたが、平成14年にスカッシュの練習中に心室細動による心不全で薨去された。これをきっかけに厚生労働省や消防庁が心室細動に対する対応を急ぎ、一般人による除細動のための自動体外式除細動器(AED)の使用が認められた。今では駅や施設の多くに常備されている。

鳥は皆ねぐらにつきて音もなく宮居の森にしじまのこれる

三笠宮寛仁親王妃信子 「森」

天皇の発案で皇居内に生息する生物調査が1996年(平成8年)から5カ年をかけて国立科学博物館により実施された。その結果、植物1366種、動物3638種が記録され、多くの新種(ワラジムシ、ミズ等)や絶滅危惧種(ヒキノカサ等)、都区内では絶滅したと思われていた種(ベニイトトンボ、オオミズスマシ等)などが見つかった。宮居は都会の中で唯一、闇としじまが残る生物のサンクチュアリなのだ。

3.2 詠進歌 55首

市街化の進みて小さきこの森に日に幾たびか小鳥集まる

岩手県 川村誠之進 平成3年「森」

住宅地の拡大は、鳥たちの居住空間を過密化してゆく。

熊よけの鈴をふりみせきびきびと森の調査に子は発ちゆけり

新潟県 木伏ツネ 「森」

調査は森の開発のためだろうか、それとも保護のためだろうか。人間に親心があるように、生息場所を狭められた熊もまた、子や自らを守らねばならないのだ。

風に転(まろ)ぶ帽子追ふさへ楽しくて発光体のごとき少女ら

神奈川県 相原トキエ 平成4年「風」

逆光に姿が一瞬溶けるとき、少女は自らが発光したかのよう輝いて見える。大伴家持の「春の苑 紅にはふ桃の花 下照る道に出でたつ少女(おとめ)」を連想させる。

春の風吹く丘に来て嫁ぐ娘と言葉すくなく蓬(よもぎ)摘みつぐ

愛媛県 清水時子 「風」

ひとは思いが強いほど寡黙になる。小津映画のワンシーンを見
るような光景である。

夫も子も消防職に就きてより心騒ぎぬ風強き日は

滋賀県 山田愛子 「風」

日本の消防は江戸時代の町火消しを受け継いで、自治体ごと
の体制となっており、約15万人の消防職員と約90万人の消防団
員がいる。年間約6万件の火事が発生し、年間10人近くが殉職し
ており、毎年全国慰霊祭が行われる。

人々の顔かがやきて竿灯の撓(しな)ふ夜空は火の匂ひする

岩手県 千葉英雄 平成5年「空」

祭りは地域の活力である。大きなもので高さ12メートル、重さ50
キロにもなる竿灯を額や腰などに乗せる妙技が披露されるたび
に沿道から歓声が上がり、竿灯が傾きそうになると「どっこい
しょー」と掛け声が上がる。竿灯は五穀豊穡を願う“光の稲穂”な
のだ。

あら磯に妻と居場所を知らせ合ひ鹿尾菜(ひじき)刈りつぐ空しら
みたり

愛媛県 山本親光 「空」

ひじきは貝塚からも発見されているので縄文時代から食されて
いたらしい。干潮の夜中から朝にかけて採取するが一人の作業
は危ないので、組になる。早朝の夫婦のシルエットは万葉の光景
にそっくり置き代えることができそうだ。

なえし手に手を添えもらひわが鳴らす鐘はあしたの空にひびかふ

岡山県 谷川秋夫 「空」

ハンセン病の隔離政策は多くの悲劇を生んだ。谷川さんは14
歳で発病し、その後の生涯を国立療養所・長島愛生園で過ごさ
れた。80歳での入選歌だが、歌会始に出席できなかったために
宮内庁の当時の規則で朗詠されなかった。これに疑問を抱いた
岡山市内の主婦が宮内庁に抗議したほか、山陽女子高校放送
部が谷川さんを訪ねて無念の思いを聞き、宮内庁にも電話取材
してラジオ番組を制作した。「拝啓、天皇陛下さま、皇后陛下さ
ま」のナレーションで始まり、「身動きできない人の作品が入選し
たときも、自分の短歌の晴れ姿が見られるようにしてください」と訴
える内容で、平成6年の全国高校放送コンテストで優勝した。

宮内庁は早速これに応じて翌7年から欠席者の作品も披露す
るよう規則を変えた。さらに12年を経た平成17年10月には、岡
山国体に出席された天皇皇后両陛下が愛生園を訪問され、谷
川さんは両陛下の前でこの歌を詠みあげることができた。平成8
年「らい予防法」廃止、13年国賠訴訟成立、21年「ハンセン病基
本法」施行。

此の波のはてに祖国の美しと孫に語らひよはひかさねる

ブラジル国サンパウロ州 村岡虎雄 平成6年「波」

財団法人・海外日系人協会によれば、日系人は現在約295万
人。2008年に移民100年を祝ったブラジルは150万人の世界最大
の日系人社会である。

波の穂の放つ飛魚輝きてわが舟の上越えて行きたり

香川県 泉谷純明 「波」

トビウオは2〜4mもの高さを時速約60kmのスピードで200m以上
も飛ぶという。海に生きる人ですら息を飲む一瞬の出会いだった
のだろう。

故国(ふるさと)の電波微かに捉へ得て熱砂のキャンプに除夜の
鐘聴く

愛知県 林誠一郎 「波」

太陽の照りつける真昼の除夜の鐘であろうか。指先に全神経を
集中して母国の音を探り当て聴き入っている。NHKは世界に向
けて18の言語で短波放送している。

卒業のうたはひとりのために流れ今日限り閉づ島の学校

長崎県 溝口みどり 平成7年「歌」

国土交通省と総務省がまとめた「国土形成計画策定のための
集落の状況に関する現況把握調査」(平成19年)によると、65歳以
上の高齢者の割合が50%を超える集落の数は7,878にのぼり、こ
のうち全住民が65歳以上という集落の数は431。10年以内に消滅
が予想される集落は423、いずれは消滅すると思われる集落は
2,220と集計されている。

歌いつつ入学式に行く子らはどの子も母よりさきに歩めり

新潟県 田辺保夫 「歌」

少子化が進む中で、“どの子も”と言えるところに地域社会の健
全な明るさがあり、未来が見えてくる。

若き等が和して励ます手拍子に老人会の歌立ち直る

神奈川県 三宅新作 「歌」

敬老の心が支える和やかで力強い光景である。平成5年に総
務庁老人対策室が一般公募で決めたスローガンは「素敵です、
年の差超えたいいい仲間」であった。

青紫蘇の匂へる苗を盲ひわが指にて尺を取りながら植う

青森県 福土重治 平成8年「苗」

欠席しても朗詠されることになった最初の歌。作者は戦争で散
弾銃を浴び失明したが、天皇陛下を慕い詠進歌に応募したとい
う。嗅覚と触覚が刺激される歌である。

しその苗 抱いて帰って水やれば日本がそこに舞ひ降りてくる

サンパウロ州 新井知里「苗」

紫蘇が日本をイメージすることに驚かされ、そして納得させられる。香りの記憶は心の深くに刻み込まれていて、その香りを嗅いだ瞬間、何十年も前の記憶が鮮明によみがえることがある。まさに舞い降りてくる感覚なのだ。

遙々とクブチ砂漠にポプラ苗うゑむと出で発つ若きらの夏

愛知県 久米すゑ子「苗」

クブチ砂漠は内蒙古自治区にある。中国全土では毎年、東京都ほどの面積が砂漠化し、春先には黄砂になって日本に飛来する。このため、現地で植林ボランティアをしながら環境問題について考えるプログラムが日本のNGOやNPOによって実施されている。

霧深し児らの姿をたしかめて朝の渡しのもとづなを解く

高知県 小谷貞広 平成9年「姿」

小学生7人が四万十川対岸の学校に渡し舟で通う、いわゆる「学童の渡し」の様子を歌ったものだが、5年後には児童数の減少で小学校が閉校となり渡し舟も廃止された。

今朝配る荷物の一つ虫籠に姿の見えぬ鈴虫が鳴く

東京都 西市郎「姿」

里の秋を鈴虫に託して送ってきたのだろうか。万葉集にも「夕月夜心もしのに白露の置くこの庭にこおろぎ鳴くも」と虫の声が詠まれている。日本人は左脳の言語脳で“虫の音”を聞くから感情を込めた“虫の声”となり、右脳の音楽脳で聞く外国人にとっては雑音でしかないと言ったのは東京医科歯科大学教授だった角田忠信氏である。

あかときのひかりのなかに髪を梳く白寿の母の姿しづけし

福岡県 大津留敏「姿」

百歳を目前にして泰然自若とした生き様は清々しい。日本人女性の平均寿命は86.05歳で、24年連続で世界一である。(平成21年厚生労働省)

草刈りしな はては風の道となり あきたこまちの開花はじまる

秋田県 伊藤順三 平成10年「道」

作者は、『宮中新年歌会始ご詠進の手引き』で「皇室が国民と一体となって、年の始めに文学事始めをやろうとしていることは素晴らしい事だ」との一文に接し、歌の内容も「私たちが詠んでいる生活視点に立っての歌となら変わらないということを知り、皇室がとても身近に感じられた」という。(秋田県南日々新聞から)

いちにちがきらきらとして生まれ来ぬ海の道ゆく父のあかるし

福岡県 吉永幸子「道」

博多湾を出港する小さな漁船。その上にすっと立った父親のたくましい背中に朝日があたっている。そのうえ、さざ波が照り返す逆光にも包まれて、子の目には誇らしくさえ見える。作者は小学生のときからいじめにあい、高校時代にはついに登校拒否となり、成人式にも出られず、母親が作ってくれた振り袖を着られなかった。入選時は27歳だったが、その振り袖を初めて着て歌会始に参列した。

己が持つ青き光の輪に乗りて螢は掌より闇に飛びたり

山口県 大場淑子 平成11年「青」

農薬や生活排水などで水が汚染されたり、護岸工事で育つ環境が失われたためにホタルの生息地が減り続けてきた。しかし、環境意識の高まりから復活を願う運動が活発となり、各地で光の舞が再び見られるようになった。ホタルは自然の保護と回復の象徴となっている。

駅七つ呑込まれたる豪雪の除雪開始の青旗を振る

福島県 斎藤弘「青」

白一色の世界に信号の赤と旗の青が際立つ光景である。豪雪地帯は累年平均積雪積算値(毎日の積雪量の30年以上の平均値のひと冬の累計)が5,000cm/日以上地域とされ、日本の国土の半分以上が指定されている。

夜勤明けの空の淡青(うすあお)美しと介護実習の子の眼耀く

佐賀県 西川友子「青」

日本は団塊の世代が75歳以上になる2025年以降、少子高齢化のピークを迎える。介護の仕事を志して、初の夜勤明けを体験した実習生が充足感から見出した真なる美。

渡りゆく時をはかりてゐるらしき燕の群が雨に濡れをり

奈良県 油谷薫 平成12年「時」

一年を二十四節氣に区分した「白露」は9月中旬の15日間で、さらに3分割(七十二候)した末候に「玄鳥去(げんちょうさる)」がある。ツバメが南に帰るころの意であるが、このころは秋霖でもありツバメの濡れ羽色が美しい。

煮立つ湯にさっと水菜のみどり苺ゆひとり美しき時の間をゐる

兵庫県 小西博子「時」

気づくということは、時の間の中にほんのわずかに立ち止まることなのかも知れない。生活のなかの細やかな感動。

「ひらひら」といふ語教へてひと時を留学生らと花吹雪浴ぶ

山口県 岡林鎮雄 「時」

擬態語は感覚的な言い回しだけに外国人にとっては会得が難しいが、リズムカルな響きには関心を持つ。桜の下で花びらが散るように手をしならせている光景であり、発音の異なる2人の声が聞こえてくる。独立行政法人日本学生支援機構が平成20年に実施した外国人留学生在籍状況調査では、留学生は123,829人。アジアから92.2%、欧州・北米から5%だった。

草いきれ車内に充ちてここよりは單線となる山峡の駅

大阪府 田中二三子 平成13年「草」

夏の線路脇にはヒメジョオンの花が似合う。ゆったりした時の流れに浸るのもローカル線の魅力の一つである。

ぎこちなき歩みなれども子は追へりゆらりと川面をゆく草の舟

静岡県 小池正利 「草」

野草が縁取る“せせらぎ”が各地で復活している。小さな橋の下に流れ込んでしまった笹舟が再び姿を現した時の嬉しい表情とはしゃぎぶりが見たい。

身ごもりて目に入るもののあたらしき名もなき草の金のさざ波

神奈川県 古山智子 「草」

身ごもった時に“母”は誕生する。政府は平成16年版少子化社会白書において「合計特殊出生率が人口置き換え水準をはるかに下まわり、かつ、子供の数が65歳以上の人口よりも少なくなった社会」を「少子社会」と定義した。その社会に入って7年目のことだった。

積み上げし堆肥押しのけ出づる芽の先のするどき春となりけり

静岡県 瀧本義昭 平成14年「春」

春の語源は“張る”であるといわれるが、芽生えは植物の生長で最も力強さを感じる時だ。子規に「くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる」がある。

青春の汗にまみれて声太くラグビーの一団駆けぬけて行く

鹿児島県 中屋清康 「春」

「一人は皆の為に、皆は一人の為に (One For All, All for One)」はラグビーを語る上でよく使われる言葉だが、それを象徴するように一塊の風となって駆け抜けていった。

トンネルのむかうにみえる僕の春 かすかなれどもいつか我が手に

大阪府 中迫克公 「春」

作者は高校1年生だった。目標は遠くにあるが確実に見えている。それを目指して進もうとする強い意志が感じられて頼もしい。

夕闇が僕の体を押してくる光へ走る夕暮れの街

大阪府 鈴木文也 平成15年「町」

これも高校2年生の歌。作者は新体操部に所属し、全国高校選抜大会では団体2位になっている。練習で疲れていたうえ、大学受験も近づいて重圧に感じていたが「そんな思いを吹っ切り、明るい未来に走っていこう」という決意を歌に託したという。

君が住むただそれだけで愛(いと)しくてあなたの街と呼びて親しむ

三重県 岡本恵 「町」

現代の相聞歌である。返歌はいかに。

夢に来ていま幸せかと問ひ給ふ母の若さの眩しかりけり

埼玉県 岡部すず子 平成16年「幸」

すべての母の願いはわが子の幸せではないだろうか。夢の母が若いのは甘えたい気持ちが今も残っているからに違いない。母という存在は人間にとって永遠の入れ子構造なのかもしれない。

人の世の幸ひまもりし廬舎那仏その大屋根に月さえにけり

奈良県 東庄日出子 「幸」

国のまほろばにふさわしい静謐なる大景である。奈良は平成22年に遷都1300年を迎える。

雪とけて塗りかへられし白線の横断歩道を子ら渡りゆく

長野県 木内重秋 平成17年「歩み」

除雪作業やチェーン走行で道路の傷みが激しいため、雪国の春は道路の白線引きから始まる。そして、まもなく新学期を迎えるのだ。

手話交はす少女二人が図書館車に紋白蝶と歩みくるなり

山口県 森元英子 「歩み」

視覚と触覚だけに頼る2人には、移動図書館がやって来るのが待ち遠しい。声なき2人が逆光に包まれて蝶と共に歩みくる姿は妖精のようでもある。手話付きのTV番組は、平成2年に『きょうのニュース～聴覚障害者のみなさんへ』から始まった。現在の『NHK手話ニュース』である。

面白きところを読みてゐるならん本を読む子の目が笑みてゐる

山口県 中西輝磨 平成18年「笑み」

「言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにするために、すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行うことができるように環境の整備が推進されなければならない」とする。

『子どもの読書活動の推進に関する法律』が施行されたのは平成13年だった。だが、自然と目が笑むような子ども目線の良書を育てることの方が先決なのではなかろうか。

宇豆賈(うずめ)舞ひとよめき上る笑ひ声天の磬戸は開かれにけり

福井県 武曾豊美 「笑み」

作者は多禰(たね)神社の宮司であり、アメノウズメノミコトの踊りを見た八百万の神々が笑いに包まれる朗らかな場面を詠んでいる。「多禰神社は式内社といっても田舎の氏神様です。このほかに二十六社を兼務していますが、神話の紙芝居を自分で絵を描いて作り見てもらっています」。教育から抜け落ちてしまった日本神話の語り部でもある。

われ笑めば母も笑まひぬおほかたの過ぎ来し日々は忘れ給ふに

高知県 安光セツ子 「笑み」

乳児が新生児微笑から社会的微笑へと進化したころの純な反射なのであろう。母と娘のあの頃の関係が逆転したのである。かつては痴呆と呼ばれていた概念が、平成16年の厚生労働省用語検討会で『認知症』への言い換えを求める報告がまとめられた。

赤とんぼ群れ飛ぶ秋のまん中へ母の笑顔を押す車椅子

茨城県 出頭寛一 「笑み」

秋晴れの空を背景に赤とんぼが群れ飛んでいるなかに、フレームインしてきた2つの笑顔。ストップモーションで永遠の一瞬にしたいシーンだ。平成12年に介護保険制度が施行されたが、18年に独立行政法人福祉医療機構が集計した要介護者は全国で約360万人。介護者は妻が16.5%、息子の妻が19.9%、娘が11.2%などとなっている。

サハリンを望む丘のうへ放牧の牛千頭を照らす満月

北海道 藤林正則 平成19年「月」

サハリン島は日本名では樺太島。宗谷岬からは海峡を挟んでわずか42キロ先にクリリオン岬(西能登呂岬)がある。平成7年から、稚内港とサハリン・コルサコフ港との間に、「平成版稚泊航路」が運航されている。

台風に倒れし稲架(はさ)を組みなほし稲束を掛く月のあかりに

徳島県 金川允子 「月」

作者は聾学校、夫は盲学校に勤務していたころ、高齢な両親のために遠方まで出かけて農作業にも取り組んだ。「土、日曜日を中心でしたが、それでも農繁期は勤務を終えてからの作業。月を見ながら稲を刈った珍しい体験が、選者の目を引いたんじゃないでしょうか」(徳島新聞)

黒板に大きき三日月吊されて園児らはいまし昼寝のさなか

愛知県 奥村道子 「月」

ユーモラスでファンタジックな疑似夜景である。園児たちはジョルジョ・メリエスの『月世界旅行』^②に似た夢を見ているのかもしれない。

月の庭蒼き梢に目守られて 昨日となる今日 今日となる明日

東京都 藤田博子 「月」

今日と明日には、どんな境目があるのだろうか。キャタピラの履板のように、365枚が長い環となって無限軌道を繰り返す。高浜虚子には「去年今年(こそことし)貫く棒の如きもの」の句がある。境目は時間より空間の方が視覚的にくっきりしているが、国境なき医師団の公共広告にははっとさせられた。「国の境目が、生死の境目であってはならない。」(平成21年)

夜神楽の火は赤あかと燃え盛り大蛇の顔の迫り来るなり

島根県 吉田友香 平成20年「火」

石見の夜神楽は江戸時代まで神官が上演していたが、明治維新の神職演舞禁止令により郷土芸能として民間に受け継がれた。石見地方には100を超える神楽社中があり、老人から若者へ、親から子へと、地域の舞が連綿と受け継がれている。伝統は地域起こしの最高の資産なのだ。

田づくりも今宵かぎりと焼く藁の赤き火見つむ妻と並びて

青森県 中村正行 「火」

体調を気遣いつつ稲刈りをした後、わらが燃えるのを見ながら、米作りもこれで最後かもしれないという寂しさと長年連れ添ってくれた妻への感謝の気持ちで詠んだもの。天皇陛下から「稲作はやめられるのですか？」と尋ねられ「体調が回復してきたので、もう1-2年は頑張ろうと思っています」と答えたという。(「広報つがる」より)

一人見る花火はさびしいものだよと赴任の地から父は電話す

佐賀県 田中雅邦 「火」

どれほど花火が美しくても、「きれいだね」と言い合える人がいないとつまらない。単身赴任の父親がもらした一言を中学生(14)の作者があざやかにすくい取っている。the0123引越文化研究所の単身赴任レポート(平成13年)には、「家族との同居のよさを改めて感じる」「家族のために単身赴任を拒否する人もいるが、単身赴任もまた別の意味の家族愛だと思う」といったアンケート結果が出ている。

梅雨晴れて校舎の窓の開(あ)くが見ゆ一年生は椅子に慣れしや

山形県 木村克子 平成21年「生」

30年間の教員生活の中で「小学1年生を担当したときに、児童をうまく座らせることができなかった」という思い出を歌ったもの。(寒河江市報「さがえ」から)

角膜は賜はりしもの今日よりはふたつの生を生きむと思ふ

栃木県 阿久津照子 「生」

心停止後に眼球を提供してもらい、角膜移植待機患者にあつ

せんする公的機関をアイバンクという。しかし、献眼者に対して3倍以上の待機患者があり、移植は何年も待たなければならぬ。 “賜る”とは素直な思いであろう。平成21年末の現在も約3,000人が移植を待っている。

生命(いのち)とはあたたかきもの採血のガラスはかすかにくもりを帯びぬ 千葉県 出口由美 「生」

献血の前、血液検査の風景を詠んだものだという。「検査の為の小さな試験管に自分の血がほとばしった時、試験管のガラスが血のぬくもりでかすかに曇るその瞬間が本当に好きで、その時の思いを歌にしました。両陛下の拝謁では、そのことを申し上げました。皇后様が『たくさん献血をして下さって、どうもありがとう』とおっしゃって下さった時の嬉しさが忘れられません。」(日本赤十字社「クロスメッセージ」から)

熱線の人がたの影くつきりと生きてる僕の影だけ動く 福岡県 北川光 「生」

広島県の爆心地に近い銀行入り口の石段に腰かけていた人が、4,000度に上る熱線を浴びて影だけを残して蒸発した。その『人影の石』を原爆ドームで見て立ちすくんだのは中学2年生の作者だった。影だけの“彼”と60年を隔てて向き合い、自分との運命の対比にどんな思いを巡らしたのだろうか。歌会始のテレビ中継でこの歌を聞いたヒロシマの語り部たちは、ブログを通して感動を伝え合っていた。「ああ、あの場所に立った子どもたちの中には、こうして感じてくれる子もいるんだって。わかろうとしてくれる子がいるんだって。修学旅行でのヒロシマが、形だけで終わっていないことに本当に感動した瞬間でございました!」「伝えなくては。伝えなくては。渡されたボタンをこうして若い世代に。」歌の力は強い。

3.3 召人および撰者の歌 30首

召人は、天皇に招かれて歌を披露する当代一流の文化人であり、撰者は専門歌人であることから、万葉歌のような視覚による直截的な歌は少ない。思覚による技巧的作品が多いため、必ずしも時代をドキュメントしているとは言い難い。よって、本稿では歌のみの紹介にとどめることにしたい。

ものなべて往きては還りまためぐる森のことはり知るや知らずや 召人 梅原猛 平成3年「森」

ひとしなみ若いも若きも立ち返るみ世を支ふるあまつ風の子 召人 長澤美津 平成4年「風」

絶ゆるなく雲流れゆく今日の空見つつやすらぐ吾が思ひかな 召人 吉田正俊 平成5年「空」

永劫の刻(とき)空にありさくら波木末(こずえ)にあふれ日輪に燃ゆ 召人 中西進 平成6年「波」

大み歌につかへまつりて年長しけふの大み歌仰ぎまつらく 召人 五島茂 平成7年「歌」

希ひこめ心に植ゑし一本の苗すくすくと伸びつつけゆく 召人 加藤克巳 平成8年「苗」

野の中にすがたゆたけき一樹あり風も月日も枝に抱きて 召人 齋藤史 平成9年「姿」

芽ぶきゆく木末(こぬれ)の空はしづかなり林に入りて道つづくかも 召人 橋元四郎平 平成10年「道」

青空の星を究(きは)むとマウナケア動き初(そ)めにしすばる称へむ 召人 藤田良雄 平成11年「青」

病める日も清(さや)けき時ともにゐて妻と迎ふる新しき春 召人 可部恒雄 平成12年「時」

山川も草木も人も共生のいのち輝け新しき世に 召人 上田正昭 平成13年「草」

春の野にわが行きしかば草なびけ泉かがやくふるさとの道 召人 扇畑忠雄 平成14年「春」

今もなほ殿と呼ぶることありてこの城下町にわれ老いにけり 召人 酒井忠明 平成15年「町」

いとけなき日のマドンナの幸(さつ)ちやんも孫三(み)たりとぞeメール来る 召人 大岡信 平成16年「幸」

老の歩みとどめて仰ぐ朝の空いまこの思ひを大切に 召人 渡邊弘一郎 平成17年「歩み」

やはらかき春の日差しに笑まふなる小さき草の花見むと思へや 召人 森岡貞香 平成18年「笑み」

天の原かがやき渡るこの月を異境にひとり君見つらむか 召人 大津留温 平成19年「月」

栲領巾(たくひれ)のましろき尉(じょう)をまとひたる囲炉裏火ぬくし夜のほども 召人 宮英子 平成20年「火」

陽に染まる飛魚の羽きらきらし海中(わたなか)に春の潮(うしほ)生れて 召人 谷川健一 平成21年「生」

沈む日の長くとどまる北極のこがねの空に神を見むかも 選者 千代國一 平成5年「空」

あけぼのの空に生まるる白き色のかがかやく朝の青となるまで 選者 岡井隆 平成5年「空」

冬波のとどろきよする竜飛崎(たつびさき)身を削ぐ風にまむかひて立つ

選者 岡野弘彦 平成6年「波」

読みすすむ防人歌にあらはれて分きても親しふるさとびとは

選者 田谷鋭 平成7年「歌」

あたらしき時世(ときよ)のごとくひとむらのあしたの雲をながくみまもる

選者 島田修二 平成12年「時」

見ゆるものみなうつしき春の夜や月下(げつか)の湖(うみ)にそよぐ水草

選者 安永蒨子 平成13年「草」

町といふことばはやさしふるさとの見知らぬ人にふと立ちどまる

選者 武川忠一 平成15年「町」

ゆつたりと風の歩みの見えながら岬に遠き風車がまはる

選者 永田和宏 平成17年「歩み」

春の日にわらわらゑまふ伎楽面呵呵大笑を聞くごとくある

選者 篠弘 平成18年「笑み」

迎へ火は今年も焚かず父母はみづからともる螢であらう

選者 三枝昂之 平成20年「火」

母がまだ生きぬし頃のこゑがする日向に出でてはいと振りむく

選者 河野裕子 平成21年「生」

注釈

[1] 万葉の時代、天皇は高い場所に立ち「国見」の儀式をして豊穰を祈った。舒明天皇の国見歌は万葉集2首目で、代表的な国誉めである。

大和には群山あれどとりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば国原は 煙立つ立つ 海原は 陽立つ立つ うまし国ぞ 蜻蛉(あきづ)島 大和の国は

[2] メリエスはフランスの元マジシャンで劇場経営者。映画の創生期において様々な技術を開発し、「世界初の職業映画監督」と言われている。『月世界旅行』は1902年製作の14分の作品。

参考文献

佐々木信綱「新訓・万葉集」岩波文庫

斎藤茂吉「万葉秀歌」岩波新書

上村悦子「万葉集入門」講談社学術文庫

唐木順三「日本人の心の歴史」筑摩叢書

与謝野晶子「全訳源氏物語中巻」角川書店

宮中歌会始「万葉文化協会編」毎日新聞社

大谷美和子「生きる・元ハンセン病患者谷川秋夫の77年」いのちのことば社

大野晃「山村環境社会学序説」農山漁村文化協会

*データの出所は本文中に記載

4 おわりに

古代日本は渡来の文化によって国の体制を整えましたが、一方で独自の文化である「やまとうた(和歌)」も培われ、「かな」が発明される以前から音を漢字で当てはめてゆく「万葉仮名」で記録されました。そして国民の多くの層の歌を網羅して体系的な編集さえ行われました。その『万葉集』は当時の暮らしを推測することのできる唯一のドキュメントであり、貴重な歴史アーカイブとなっています。万葉集を編んだ「歌の前に平等」の精神が今に生きる「宮中歌会始」の詠進歌もまた、市井の人々が生活の中の一隅、あるいは一瞬の感興から記録した最も短い時代のドキュメントです。最短は俳句だろうとの反論があるかもしれませんが、俳句の17文字に続く4句と結句の14文字分にドキュメントとしての要素が含まれているように思われます。そして、さらに背景を知ること、歌が単なる情景としてではなく、生き生きとした映像として立ちあがってくるのです。

いずれにしても、宮中歌会始を単なる年中行事としての催事に終わらせずに、時代の証言としてアーカイブされることを提言して本稿を閉じることとします。